

★★★
第4回
パーフェクトな仕事

学習時間

40分

学習日

月
日

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ぼくにはがむしゃらすぎた時代があった、と述べた。父からよくへと世代交代する前の数年間だ。すでに調理場の仕事は習得し、周囲が見えてくるようになっていた。^①その余力の予先が、より完璧な仕事、よりお客さんへのサービスの徹底へと向かっていったのだ。

^②どうしてもパーフェクトを求めなければ気がすまない自分がいた。たとえば、この野菜の長さは、この長さでなきゃいけない、など。ゆくゆくはトップにならなければいけないのだからと勝負しすぎていたということもある。かかげた理想に近づくために、「こうしなきゃいけない」「あしなきゃいけない」と考えすぎてがんじがらめになっていた。

しかし、人間のだから完璧なんてありえない。実際みなどこかしらで失礼なことをしているものなのだ。人間だから失敗もするのだ。「ああ、これは失敗したな」と思ったことをあまりしないように気をつけたいのである。

〈全部パーフェクトでやる人間なんてどこにもいない。いたら気持ち悪いよなあ。なんでもできちゃう人がいたらそんなのスーパーマンだよ〉

^③そのくらいの気持ちでやったほうが長続きする。そうやって少し気楽に考えることができるようになったとき――

長さであれば、少し長くても「まあいいか、みつともないけど、これくらいのほうがおしゃれたね」と思える余裕ができた。何かあっても「失敗は成功のもと」と思える心のゆとり。ぼくが弟子に教えているのは、その余裕と、しかしお客さんに対しては、できるかぎり厳しくパーフェクトを目指さないといけないという義務である。

^④教えることも難しい。どうやってみなを動かしていけば、これらのことが伝わるのか。全部が全部意思を伝えられるかといったら、これだってパーフェクトにはいかない。ときには厳しいことも言わなければいけない。とくに自分の右腕、左腕に対しては厳しい。ぼくも毎日考えながらやっているの

で、考えが常に一緒というわけではない。変わりもある。わからないことだってある。ぼく自身、短所もあるのに、それでもやっぱり店の料理長をつかまえて言わなければいけない。「こういう部分を直せ」「こういうようにしよう」と。でもきついことを言う代わりにきちんと言う。「どうしてこういうふうにしなきゃいけないか」ということも。

つきつめて言えば、おいしいものも作り、さらにお客さんのことも考えられる、ぼくの弟子はそうあってちょうだいね、ということ、そのときどきの*事象をもって伝えているということになるだろう。ぼくは思うことは全部伝える。それで、そのようにできるかできないかはそいつ自身の問題だ。できるやつがぼくの右腕、左腕になっている。修業とは料理の技術を

今回の問題文

筆者は、仕事をするとき何を目標すべきだと考えているのかな。

問一

――①、「その余力」の説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 基本的な仕事を習得したため、周りの様子に目を向ける余裕ができたということ。

イ 調理場の仕事を身につけたので、師匠である父から店のことをすべて任せられるようになったということ。

ウ より完璧な仕事やサービスを目標したいという欲が生まれ、周囲に厳しく接するようになったということ。

エ 仕事の基礎を習得し終わり、ゆくゆくはトップに立って店を動かしていくという自覚が生まれたこと。

問二

――②、筆者がそのように感じていた理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 野菜の長さや切り方などの細かいところで料理の味が変わると、父に教えられていたから。

イ 父から教わった味のまねではなく、自分自身の味を作り出したかったから。

ウ これから自分の代わりとなって働いてくれる弟子を、早いうちに見いだしたかったから。

エ いずれは店のトップになるという自覚があったため、理想を求めて勝負しすぎていたから。

問三

――③、「そのくらいの気持ち」の説明として適切でないものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 人間だから失敗するのは自然なことだよな。

イ ときにはきついことも言わないといけないよな。

ウ 失敗したら次に気をつけなければいいんだよな。

問四

――④、「これらのこと」をまとめて言いかえている表現を文章全体から二十五字で書きぬきなさい。

